
月煌戦鬼フォルティス

銀丈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月煌戦鬼フォルテイス

【Nコード】

N4584BA

【作者名】

銀丈

【あらすじ】

正義の馬鹿、影山銀。

ある朝目覚めてみると、彼の寢床には吸血鬼と称する少女が転がり込んでいた。彼女との遭遇をきっかけに、銀は闇の存在との闘争に引きずり込まれることとなる。

閉鎖済み自サイトより転載

第一話「凶兆」

よく夢を見る。

触れれば切れそうなほど細い銀色の三日月を背に佇む、美しい銀髪の女。その整った美貌には、底知れない愁うれいが漂う。

それが誰で、なぜ自分がその夢を見るのかは解らない。だが、物心ついてから、不規則とはいえその姿を見続けてきた。だから、それは自分にとつての理想像のようなものなのかも知れない。

今夜は、今まで見慣れていた絵画のような夢とは、少し違っていた。なぜなら、彼女がこちらを振り返り 目が合った。それは、美しく澄みきった瑠璃色……。

目が覚めたらロリがいた。

ロリ。ロリータの略。幼女好きに対する幼女の典型例。要するに女の子。

見たところ幼稚園児……せいぜいでも小学校低学年。身長に余りある長い白金の髪、細く凹凸のない小柄な体にまとつているのは、黒いぼろ布だけ。そんな姿が、ベッドの中、自分にぴったり寄り添って眠っている。

カーテンの隙間から差し込む日光で明るい部屋の中。

影山銀かげやまぎんは身を起こすと、寝相の悪さというよりも元からの硬さで激しく逆立っている黒髪の手入れもとりあえず、自分の頬をつねってみた。

痛い。現実なのは確からしい。

次いで、蹴る。ベッドから落下した幼女の頭が床に激突し、ごちんといい音をさせた。

何はともあれ、わざわざ見知らぬ奴を自分の布団の中に入れておく義理はない。銀は再び布団に潜り込んだ。

「いたたた……」

幼女が立ち上がったようだが、銀の知ったことではない。まだ眠いのだ。

「こ、こは……ああ、そうだったわ」

一人で納得し、部屋の外へと歩き出す……が、そこでバランスを崩し、ぽてつとその場に倒れて動かなくなった。

数刻後、銀は本格的に目を覚まし、ベッドを抜け出した。そこでようやく、床に突っ伏したまま動かない幼女の存在に気付く。

「ん……？」

銀は一人暮らしだ。母は既に亡く、父も大型客船の船長という仕事柄、年に数度しかこの一戸建てに帰って来ない。

やろうと思えば何をして咎める者はない。しかし、だからといって自分にロリコンの趣味はないし、当然通りすがりの小学生を拉致してきた覚えもない。

「誰だおまえ？」

「……私？」

けだるげにもそもそもと上体を起こし、獣を思わせる縦長の瞳孔を持つ深い瑠璃色の眼で、銀を見上げる幼女。

「……通りすがりの吸血鬼」

「人ん家の部屋ん中を通りすぎるなっ！」

幼女が答えるなり、銀のチョップがその脳天に炸裂した。

「い……痛い」

「ったく、言うに事欠いて吸血鬼だ？ 朝っぱらからバカ言ってるじゃねーよ。一体どっから入って来たか知らねーが……うわ臭っ！」
幼女の全身から漂う生臭い異臭に気付いて、銀は大きくのけぞった。

「……あ」

言われて、幼女自身も自らがまとっぼろ布に鼻を寄せて臭いに気付くと、気まずげに口をつぐんだ。

「あの、ええと……きゃっ！」

弁解をしようとした矢先、猫よろしく襟首をつかまれる。

「ちよつ、な、何を？」

「くせ臭えから洗えーっ！」

訊いた時点で少女は返事とともに風呂場に放り込まれていた。あまりの勢いに、びたーん、と音を立ててタイル張りの床にのびる。

「い、痛い……また？」

ぼやきつつ、打ちつけて赤くなった鼻を押さえ、少女はぼろ布を引いた。

ばりばりと音を立てて赤黒い粉を散らしながら、ぼろ布が未練がましくそのか細い体からはがれ落ちた。

「食わねーのか？」

「朝は弱くて……」

自分の分までしっかり並べられた皿を前に、困ったように首を軽く横に振る少女。その表情や物腰は、未成熟な容姿に反して老成した落ち着きをたたえており、神秘的とも言える違和感をかもし出している。

ちなみに、さっきまでまとっていたぼろ布は、体からはがれた時点で粉々になり、もう使い物にならなくなっていたため、今は白いTEEシャツを着、腰には薄緑のシャツをスカート状に巻きつけている。両方とも元々は銀のものなのでサイズが合わず、だぶだぶだ。「朝メシは一日の始まり！ いい加減に扱って、いつまでもガキのまんまだぞ！」

「今はちよつと……血の方が」

「まだ言うか。大体、この朝っぱらになんで吸血鬼がのんびりテールについてんだよ」

「あなたが引きずってきたようなものじゃない……。日光のことなら、私はちよつと丈夫だから、平気」

日光を浴びると灰になる。吸血鬼の有名な弱点を、最初から無視しているらしい。

「ニンニクは？」

「平気」

「十字架」

「純銀製はちよつと……」

「本当に吸血鬼か、おまえ」

「本当よ、ほら」

幼女は上唇を押し上げ、発達した犬歯を見せた。表面が微妙な桜色をしているのが、幾度となく血液に触れたためだとすれば、確かに説得力がある。

「へー、やっぱ世の中広いんだな」

あつさり納得すると、銀は食事を再開した。

「……それだけ？」

「大の男にぎゃーぎゃーわめいてほしいのか？」

「まあ、そういうわけではないわね」

「ところで、本つつつ当に食わねーんだな？」

「え、ええ」

「そーかい。せっかく用意してやったつてのによ」

口で言うほどは気分を害しているわけでもないらしく、二人分の朝食を半ば以上喜々としてばくばくかつ込む銀。

「……あ、そついやまだ名前訊いてなかったな」

「私は、イリス。イリス・リヒトホーフエン」

「オレは影山銀。で、なんで人の布団に勝手に入ってた？」

「それは……、昨晚この辺りをまわっていたのだけれど、ここに来た時点で力尽きてしまつて。もう動けそうになかつたから、せめて人目を避けられないかと、お邪魔させてもらつたの」

「はた迷惑な奴……あ、じゃあオレの血も吸つたのか？」

「いいえ……つて、ひよつとして、くれるの？ 助かるわ、少なくとも今は吸つて吸い過ぎるということがないから」

「腫れたり痒かゆくなつたりしなけりゃな」

「……蚊ではないのよ、吸血鬼は」

イリスはがつくりとうなだれた。

吸血鬼と蚊、いくら同じ「血を吸うもの」であっても、同列に論じられるのはさすがに。

「あーっ！」

不意に銀が大声を上げ、それに驚いたイリスが思わず身を震わせた。

「な、何？」

「遅刻だ！ やっべええっ！」

時計を見て再び叫ぶと、銀はとたんにはたばたし始めた。食卓の前を行き来するうち、見る間に支度が整ってゆく。

あつという間にまとわれた学生服。首には季節をまるで無視した、長く幅広の真っ赤なマフラー。おまけに、背中の竹刀袋には年季の入ったぼろぼろの木刀。

「後よろしく！ 行って来ますっ！」

「え、ちよつと……？」

何か言う暇もない。ドアの閉まる音だけが無情に響いた。

「……ついさつき知り合ったばかりの相手に、自分の家なんて預ける、普通？」

イリスはあつけにとられて呆然とつぶやいた。

が、しばらくすると椅子を流しへ押しいき、上に乗って食器を洗い始めた。

こちらもちちらで、律儀な性格をしていたらしい。

「うおおおおっ！ やっべええええっ！」

はた迷惑にも朝っぱらの路上で叫びつつ、雨上がりの湿ったアスファルトから泥を跳ね上げて疾走する銀の姿は、予鈴の鳴り響く校舎へと瞬く間に吸い込まれていった。

ぎりぎりセーフだ。

「よお、相変わらずの走りっぷりだな」

息も荒く、汗だくで机につ突つぶ伏す銀に、声がかげられた。

「……孝次か」

顔を上げた先には、銀ほどではないにしろ、逆立った、茶色い髪
の少年。

御堂孝次^{みどう}。ひよんなことで知り合ってから、よくつるむ仲だ。

「どーした？ また面白いサイトでも見つけたか？」

だるさを隠そうともせず応える銀。

悪い奴ではないのだが、この（自称）情報通は一旦しゃべり出すとなかなか止まらないため、激しい運動の後に相手をするのは結構つらいのだ。もっとも、その「激しい運動」をせざるをえない状況を招いているのも自分なのだ。

「……………ってことは、まだ知らないんだな」

「何がだ？」

「昨日、殺人事件があったらしいんだよ。すつげえんだ。被害者、上半身をこっそり吹き飛ばされてて、見つかったのが下半身だけだって話だぜ」

「うええ……………とんでもねえな」

そういってどうでもいい時に限ってたくましくなる自分の想像力が恨めしく思え、銀は顔をしかめた。

「だろ？ どうすればあんなことできるんだろな？」

ことさら大げさに身震いして見せる孝次。

「ああ」

「あ、そうそう。おまえの家の近くでも、集団貧血事件が起こったらしいな。今朝ニュースでやってたけど」

「集団貧血？ そちら中で血が足りなくなっただってことか？」

「ああ、そうらしい」

「血……………」

いるではないか。他人様の血を減らす存在が。自分の家に。

「……………あのロリガキ……………」

「口……………何？」

「なんでもねえ」

「そっか。あとな……………ありゃ、もう来ちゃった」

また何か言おうとしたところで、やって来る教師の姿を認めた孝次はしぶしぶ話を中断し、席に戻ってゆく。
そうして、日常がいつも通り始まった。

第二話「孤高」

放課後の体育館裏といえば、活劇や惨劇の舞台になるのが定番なのだろう。

実際、ここもそうだった。

「だーっはっはっはっはっ！ 正義は勝あつ！」

真紅のマフラーを風になびかせ、銀は両手を腰に当ててむやみに力のこもった勝利宣言を発した。

周囲に広がる惨状。十人を下らない数の少年たちが、顔を腫らしてほうほうの体で転がり、折れた木刀や曲がった鉄パイプが、墓標よろしく間近の地面に刺さっている。

数人の、いかにもひ弱そうな生徒たちが、取り囲まれてカツアゲに遭っていたところに銀が乱入した結果が、これである。これだけの被害をもたらしておきながら、背中の竹刀袋の中身は出ていないから尋常ではない。

乱闘の最中に礼の一つも言わずに逃げてしまっているらしく、既に本来の被害者たちの姿は見当たらないが、銀にとってそんなことはあまり気にならなかった。

正義を行ったかどうか。要はそれなのである。

「もう人様に迷惑かけんじゃねーぞ。じゃな！」

言いたいだけ言うと、銀は教室棟の方へ走り去っていった。実は孝次を待たせているのだ。

「……遅えよ」

案の定不機嫌そうに、孝次は銀を軽くにらんだ。

しゃべっている最中に相手がいきなり「悪の匂いだっ！」などと叫んで教室を飛び出して行けば当たり前だろう。日常茶飯事とはいえ、容認しきれることでもない。

「心配はしてくれねーんだな」

「校内に銃を持ち込む高校生なんて、少なくとも日本にゃいねえだ

る」

要するに、銀はそれほど突き抜けた戦闘能力をもっているのだ。しかも、それが暑苦しい根性論と勸善懲惡思想かんぜんちようあくに染まっているから余計に性質たちが悪い。

「おまえを見てると「心配」なんて言葉自体がバカらしくなってるんだよ」

「そりゃ悪かったな」

あからさまにいやそうな顔で、銀はカバンをかついで歩き出した。

「よし、銀。タコ焼きおごれ」

「は？」

「人を待たせた罰だ。……っつーか腹減ってたんだ」

「ったく……いいぜ。オレもなんか食いたくなっただし」

そんなわけで、しばしの後、二人の姿は街角にあった。

「……うまいけど……付いてくるマヨネーズがひでえな。ほとんどただの脂肪じゃねーか」

「そーか？ デリケートな奴だな」

ぼやく孝次を意に介さず、孝次に数倍する量のタコ焼きをもぐもぐとほおばる銀。

「おまえが鈍感すぎるんだよ。今まで、調理実習でおまえと同じ班になった奴がどんな目に遭ってきたか忘れ……いや最初から覚えてねえんだろーな」

言いかけて、全くきよとんとしている銀の顔を見た孝次は口をつぐんだ。責めても無駄な気がしてきたのだ。

「オレ、なんかやつたっけ？……お、そうだ」

「いや、やつぱいい。忘れろ……ってまだ食うのか!？」

さらに一箱買って来た銀を見て、孝次がのけぞった。

「違えよ。家に持って帰る分だ」

「つくづくよく食う奴……」

銀にしてみれば、いきなり留守を任せた幼女イリスへのみやげのつもりだったのだが、孝次にそんなことを知るよし由もないし、銀

自身面倒くさいから言うつもりはない。それに、彼女が去っていた場合は、やっぱり自分で片付けることになるのだから、孝次の驚愕もあながち間違いいではない。

ただ、帰ってしまったえばいくら騒いでも独りだということ考えたくないだけだ。

「気分悪くなってきた……。じゃな」

「おう」

相方がいなくなり、銀も家路についた。

玄関の鍵は開いていた。

「ただい……？」

ドアを開けたとたん、何かが銀の鼻先をくすぐった。

「何だ、この匂い？」

怪訝な表情を浮かべたまま、明かりの点いている居間へ。

そこには 予想だにしなかった光景が広がっていた。

銀自身の部屋にも劣らず散らかっていたはずが、綺麗に片付いている。そればかりか、ほとんど物置と化していた食卓に、湯気を立てるほかほかの料理がのっていたのだ。

「……おいおいおい……なんだよこれ……」

「ん……？」

銀の呟きを聞きつけてか、死角になっていたソファアの向こうから小さな声と衣擦れきんすずの音がし、目をこすりこすりイリスが起き上がった。

「あら……お帰りなさい……」

「おか……え……まさか、これ、全部おまえが？」

「ええ」

「すっげー……ありがとな！」

「一応、一宿一飯の恩があるから……？」

いきなりタコ焼きの箱を手渡され、イリスは怪訝そうに銀を見上げた。

「みやげ。礼代わりに食つとけ」

「あ、ありがとう……。じゃ、私はこれで……」

「あ、おい待てよ」

「え？」

これでもう義理は果たした、と立ち去ろうとするところを呼び止められ、イリスは訝しげに振り返った。

「もう暗いぞ。最近物騒らしいし、メシくらい食ってけ……。つつつても、おまえが作ったやつなだけだよ」

「物騒つて……。それ、夜行動する吸血鬼に言う台詞ではないと思うわ」

「うつせーな、それに……。その、……。なんだ」

自分から言い出しておきながら言葉に詰まって困っている銀の様子を見、イリスはくすつと笑みを洩らした。

「独りの食事が寂しいのね？」

「っだーっ！」

凶星を突かれた。

「そーだよ、文句あつかくしょー、年下に言われると余計むかつくぜっ！」

「うふふふ、いいわよ。付き合ってあげる」

地団駄を踏んで悔しがる銀に、イリスは柔らかな笑みで応えた。

「はい、あーんして」

妙に嬉しそうに、銀の向かいに座ったイリスが器用な箸さばきで銀の口におかずを運ぼうとする。

「……おい」

「ほら、口を開けて、銀」

「おいってばよ」

「なに？」

「いきなりなれなれしくねーか？ しかも全っ然、腕届いてねーし！」

銀の言う通り、イリスの腕の長さは、隣に座っていて箸の助けが

あつても、銀の口に到達するには足りない。小柄すぎた。

「どうも他人という気がしなくて。でも、寂しがつて私を求めたのはあなた自身じゃないの」

心外だと言いたげに肩をすくめて、銀に食べさせ損ねたおかずを自分でもぐもぐ始めるイリス。

「誤解を招くような言い方すんなっ!」

「怒ってばかりだと寿命が縮むわよ」

「くっそー……」

言い返せないのが悔しい。

「……ほら、これならいいでしょう? はい、あーん」

軽く膝立ちになったイリスが、改めて箸を伸ばす。

何でこんな年下が自分より口がうまいのだろう。世の中何か間違っているような気がする。

無然とした表情でされるままになりながら、銀は思った。

そして食後。

何をするでもなく居間でぼーっとテレビを見ていた銀の膝に、やつて来たイリスがちよこんと座った。

「またかよ……」

「人に触れるのはいや?」

「ふん、別に」

「寂しくて寂しくてたまらないとき……誰かに触れていたいと思わない? 少なくとも、私はそう」

「だ……誰が、んな女々しいこと思うかよ」

「……男の子って不便ね」

「うっせえ」

先程と同様に思わず揺れてしまった本心を見透かされ、銀はすねてそっぽを向いた。

「ねえ、抱っこして」

「……変なところガキなんだな。別にいいけどよ」

言われるまま、腕を回す。

「だって『抱きしめて』なんて言ったら照れない？」

「！」

イリスのその一言に、銀の体が固まった。

「……ロリコンの気はねえよ」

そう言いつつ、銀の頬はうつすら赤い。だが、イリスの態度に異性を意識してしまったただけなので、厳密な意味のロリコンではない。多分。

「やっぱり照れているじゃない」

「ふん！」

いつそまた蹴落としてやろうか、と思ったりもしたが、腕の中に感じる人肌の温もりも決して悪いものではない。思い直し、銀はしばらくそのままじっとしていた。

ぼうつと二人そろって上の空でテレビを眺めていてどれくらい経つただろうか、不意にイリスが身じろぎした。銀の腕を離れ、白金の髪をかきあげる。

「しょくじ……してくるわ」

「……吸血鬼って、伝染るのか？」

「いいえ、唾液感染はしないし、今までに私と同じモノになった人もいないわ。じゃ……行つて来ます」

「……おい」

何となく、呼び止める。

「なに？」

意外そうに振り返るイリス。

「なんだ……その、あんま遅くなんなよ」

「ええ。日の出前には戻るわ。あなた……暖かいから」

柔らかな微笑を浮かべると、イリスはきびすを返して部屋を去って行った。

「……ちくしょーめ、年上おちよくんじゃねーよ、クソガキ……」

残された銀の呟きには、言葉の厳しさに反して、ほとんど刺がなかった。

第三話「剣心」

堅い音を立て、木刀と木刀とがぶつかり合う。

「いいねえ」

呟いたのは、互いに飛び退き、間合いを取り直して対峙する、袴姿の剣士の一人。笑顔が地らしく、目の細い、なんともどかな風貌の青年である。

「前よりも随分太刀筋に伸びが出てきてるよ。油断していると僕も危ないなあ。あはは」

「そりゃ無傷で何発も入れといて言うせりふ台詞じゃねーだろ、篤郎さん……」

「ほやくもう一人の首には、相変わらずの真紅のマフラー。もちろん、銀である。」

「いやあ、恥ずかしながら、一旦勝負に入ると、僕は性格変わっちゃうから。基礎体力と反射神経だけでついてくる銀くんの方が凄いや」

「よ
青年の名は、和泉^{いずみ}篤郎という。銀とは旧知の仲であり、この和泉一心流道場の主を務める剣術師範でもある。」

「もう一丁お！」

「うん、いいよ」

再び、木刀が唸りを上げてぶつかり合う、激しい^{けんげき}剣戟が始まった。「だありやあああつー！」

剣術と呼ぶには荒削りすぎる、まっすぐな銀の木刀さばき。それは、整った型を保っている篤郎のそれと、左右が対称姿勢も対照、と同音異義を体现し、レベルでもかなりの精度で迫っていた。

だが、やはり凌駕というまでには及ばないらしく、いままだ有効打はなく、逆に篤郎の斬撃は防御の隙をくぐり抜けて銀に届いている。

「でえい！ ちくしょー！」

「うーん……やっぱり凄い」

猪突猛進、という言葉を実現する銀の勢いに素直に驚く篤郎。だが、その万年笑顔のせいで何を考えているか自体判らず、余裕を見せつけているようにしか見えない。

「そろそろ、終わろうか」

その言葉が放たれた時点で。外見からは想像もつかない鋭い一撃が銀を襲っていた。

「でっ！　ち……つきしょーっ！」

格闘ゲームの決着よろしく、くやしがりつつ大きく後方に吹っ飛ばす銀。

それでも、とんでもない速度で迫った横薙ぎに反応し、とっさにそれを受けたこと自体十分驚嘆に値する。普通なら、気付くことさえもできずに深手を負っているところだ。刃がついていないとはいえ、木刀の殺傷能力は決して低くない。

「ありやあ……大丈夫かい、銀くん？」

「大丈夫じゃねー……素人に本気出すなよ……」
力尽き、大の字になったままぼやく銀であった。

何となく暇な気がして、銀が放課後道場へ来てみると、門下生が少ないせいで、やっぱり暇そうな篤郎が、道場で一人ぼーっとしていた。

こうして二人の都合と気分とが互いに一致する時に「稽古」とは名ばかりのしごきが始まるのだ。

「お疲れ。はいこれ」

「お、ありがとう」

投げ渡されたスポーツドリンクのペットボトルのふたを開けるなり、あらかた一気に流し込む。

「っはー、汗かいた後の水分補給ってないもんだぜ！」

「あはは。そうだね」

篤郎はあくまでまともに、くいっと一口。だが、さっきまでの運動量を考えれば、こちら普通とは言いがたい。

「あ、そういえば……」

「ん？」

「また喧嘩のうわさを聞いたよ」

「……信用ねえなあ。全部素手だよ。『鞘のない刀は持ち主も傷つける』だろ？」

かつて聴かされた、力に対する自制の心得をそらんじてみせる銀。「疑ってごめんよ。それなら問題ない。むしろ完璧だ。あの頃とは見違えそうだよ」

「やめてくれよ、恥ずかしい」

端的な表現でも充分通じるのだろう、銀はす拗ねたようにそっぽを向いた。

「ところで、彼女でもできた？」

「！」

不意打ちに、思わずぶうっ！と噴き出す。

「げえほ、げほっ！ い、いきなりなに言い出すんだよ！」

「あはは、ごめん。急に剣の質が変わって見えたからね。たとえば、「剣豪」が「騎士」に、ってくらい」

「なんだそりゃ？」

「まあ、言っただって照れるだろうし、やめとくよ。あはは」

「そこまで言っというそりゃねーだろ」

くっつかかるものの、体力の消耗が激しいせいで力尽き、ぱったりと途中で倒れ伏す。

「ちくしょー……疲れたぜ……」

「大丈夫？ 雨も降り出したようだし………なんだったら、泊まっていくかい？ 学校もあるだろうから、早起きしなくちゃいけないだろうけど」

屋根を叩く雨粒の音に天井を見上げ、篤郎が訊く。銀の一人暮らしは先刻承知だ。

「いや、帰る。用事があるんだ。じゃ、ありがとうございましたっ」

「うん、ありがとうだね。気を付けて」

「うつす」

重い体を引きずって銀は立ち上がった。

(……………あのクソガキ……………)

泊まるか、と訊かれた時に、結局今朝も自分のベッドの中で拝むことになってしまった面影が頭をよぎったのが、なんだかしゃくだった。

慚然とした顔で着替えを済まし、道場の玄関を開ける。

「……………おいおい……………」

土砂降りだった。

「……………仕方ねえな」

いまさらになつて、戻つて「傘貸してください」などと言つのも格好悪く思え、銀は勢いよく足を踏み出し

「銀」

「へ」

不意に聞こえた、覚えのあるメゾソプラノに気をとられ、体は勢いがついているのに、足は止まっている。必然、銀は目前の水たまりに上半身まるごと突撃する羽目になった。

「ぶわっはー！」

「……………大丈夫？」

「大丈夫なわけ……………って、なんでおまえがこんなところにいるんだ？」
傍らで傘を差しかけているイリスの存在に気付き、銀はぶるぶると水を振り払いつつ、目を丸くした。

「あなたのマフラー、見た人は全員覚えていたわ」

こともなげに言うイリス。

銀の通った道筋を人づてに訊いてたどって来た、ということらしい。確かに、年中赤いマフラーをなびかせて走り回っているような人物はそうそういない。

「で、何の用だよ」

「こんな天気でしょう？ ちょっと心配になつて。でも、私の背丈ではあなたまで入れてあげられないから、あなたが持つてちょうだ

い

「そう言つて、傘を手渡す。」

「ああ、ありがとよ……つて、あれ？なんで自分の分は持つて来なかつたんだ？」

「銀が入れてくれれば済むじゃない」

「……しょうがねえな」

そんなこんなで、二人は歩き出した。

話題もなく、しばらく無言で歩いているうちに、ふと、イリスは気付いた。

自分に接していない側の銀の半身が、傘からはみ出してびしょびしょに濡れている。そしてその分、イリスに割り当てられている面積には余裕がある。

(私……を?)

黙つていられず、イリスは銀の手を引き、腕をからめた。こうすれば、密着する分だけ各々に必要な面積そのものが小さくなる。

「これなら、あなたもあまり濡れないでしょう？」

訝しげに見下ろす銀に、言う。

「はあ？」

半ば呆れ顔で問い返す銀。自分の半身が濡れていることなど最初から意識にないらしく、反応はそれだけだった。

(……地、なのね……優しいのは)

イリスの口元から、笑みがこぼれた。

「気味の悪い奴だな……お、今夜は満月か」

薄くなり始めた雨雲を透かして見える金色の光を見、銀が呟く。

「……銀、浦島太郎のお話、知っている？」

ふと思ひ出したように、イリスが訊く。

「ああ。そついやおまえ、なんでそつやたらと日本のことに詳しいんだ？作るのも味噌汁だし……」

しかもだしをとることから始める本格派。手馴れているだけでなく実際に美味しい。

「それは、秘密。ねえ、地上に戻ってきたとき、浦島太郎は一体何を思ったのかしらね？」

「んー、時間だけが過ぎてた、って話だったよな。……知ってるやつがみんな老けるか死ぬかしてて、やっぱ寂しかったんじゃねーか？」

「でしようね。自分の存在を知る者が残らず死んでしまえば、例え実際に生きていても、いないのと同じことになってしまう……」

どこか虚ろな表情で呟くイリス　と、銀の前に何か降ってきた。

「……なんじゃこりゃ」

それは、下半身がもぎ取られて失われた着せ替え人形。手にとった銀が首をかしげたのも無理はない。だが、逆にイリスの表情はそれを見て変わった。

「……銀。急にお腹がすいたから、行って来るわね」

「ああ。……夜は寒いんだから風邪ひくんじゃねーぞ。看病なんて面倒くせーことしたかねーからな」

銀はいやそうに言ったが、その時点で「風邪ひいたら看病する」という発想があるのが見てとれる。

多分、なんだかんだ言いつつ、いざとなれば何とかしてくれるのだろう。そう思うとイリスはなんだかおかしかった。

「ねえ、銀……私の名前、呼んでくれない？」

「ああ？」

「いいでしょう？ 減るものでもないのだし」

「いきなり変な……いや、元から変か。……「イリス」。これでいいだろ」

「ええ、充分。ありがとう、銀。憶えていてくれて」

微笑むと、イリスは夜の闇の中へと消えていった。

第四話「傷痕」

金色に燃える真円の下、ひとけ人気のない暗がりを駆け抜けてゆく、小柄な影が一つ。

白いティーシャツに、スカート代わりの薄緑のシャツ、そして、長くくせのない白金の髪。イリスである。

広々とした公園の奥にある深い森の中で足を止め、前を見据える。「つくづく呆れた生命力だぜエ」

イリスの視線を受け、スキンヘッドの男が物陰から現れる。

「体半分ちぎられても再生してやがる。ガキの姿なのは肉が足りないせいかア？」

舐めまわすようにイリスの全身を観察しながらそう言った。

「随分とまたいやらしい呼び出し方をしてくれたものね、アトラッハ」

「いやらしい？ 何がだア？」

「わざわざ彼の鼻先に、私と同じ姿の人形を落としたこと。あれが脅し以外の何だというの？」

「やあっぱりあんたの男だったか。に……してもよオ、その窮屈そうナリでおとせる辺り、よっぱど「小せエ」んだなア」

男 アトラッハはイリスの腰に視線を落とし、けび下卑たわら嗤いを浮かべた。

「……どうして、そつとしておいてくれないの」

イリスの表情は、ただ静かな哀しみに沈んでいる。

「この世にたった一体の貴重な実験材料をほっとくわけがねエーだるブワーカ」

楽しげに、か細い問いを踏みにじるように、げらげらと嗤う。

「ってわけでエ、決めなア。俺と戻って生き長らえるか、ここで死ぬかよオ。極論「入れ物」なんざ、いつどこで壊れたって関係ねえつてお達しだからなア」

「三番目……あなたを斃^{たお}して行方をくらませる」

真顔になって向き直ったアトラツハに対して、イリスはきっぱり言い放った。アトラツハの嗤^{わら}いが深くなる。

「ヒへはははははッ！　そうかよオ！　そうこないとなア！　実を言うとなアア、俺もその返事を待ってたんだぜエ」

腕を左右に広げた男の全身に力がこもり、大きく震えた。抑えきれない、獣じみたうな唸^{うなり}りが、噛み合った歯の隙間から漏れる。

内からの圧力に抗しきれず、男のまもっていたトレンチコートが音を立って裂け、弾ける。

外気に触れたのは、人の肌ではなく。赤黒い鎧　否、外骨格。

「この体がどれだけ使えるか、知りたかったからなアア。それとオ……」

八つの眼、六本の腕。阿修羅像に「蟲^{むし}」の醜^{みにく}悪な誇張を加えたような、蜘蛛^{くも}と人類の融合体と化したアトラツハが、口の触指をいやらしくうごめかせながら言った。

「俺の守備範囲はこう見えて結構広いんでなア。好きに犯^やらせてもらうぜエ……」

おぞましい姿にもまして、元からのねちっこい口調が余計に嫌悪感をあおる。

「生憎^{あいにく}ね。私は強いわよ」

「本来の姿なら、だろオ？　さあア……殺^やるかア……」
思わせぶりにアトラツハが一步踏み出し。

「勸^{すす}・善^{ぜん}・懲^{ちやう}・悪^{あく}うっ！」

「ぐっはあッ！」

突如横合いから乱入した何者かの靴底が、アトラツハの顔面を襲った。思わぬ伏兵にとっさに対処しきれず、直撃を食らってよろめくアトラツハ。

「悪の匂いがしたから来てみれば……悪の秘密結社って本当にあったらしいな」

「ぎっ……銀!？」

はためく赤マフラーを見て思わず声を上げるイリス。
いきなり現れて特撮ヒーローマニアじみた台詞を吐いたのは、影
山銀その人だったのである。

「……あ！」

何でオレの名前を？ と言いたげに声の主を振り返り、銀はよう
やくそれがイリスだったことに気付いた。

「ちょうどいいや。これおまえのだろ？」

言って、懐から取り出した漆塗りの古びたかんざしを放る。イリ
スの去っていった後に落ちていたものだ。

「あ、ええ、ありがとう……」

それはやはりイリスの、しかも大事なものだったらしく、彼女は
受け取ると大切に胸に抱きしめた。

「さて！」

びしっ！ とアトラツハを指差す銀。

「残念ながら、正義の味方って奴あ實在しねえんだよな。だから、
てめえの相手はオレがする！」

「銀、やめて！ 自殺行為だわ！」

イリスが必死に銀の腕を引き、止めようとするが、銀の方には全
く構う様子がない。

「うっせえ。がきんちよをこんなの前にほっとくのは、オレの心
に燃えたぎる正義の炎が許さねえんだよ！」

「面白エじゃねえかア。度胸は認めてやるけどよオ、てめえも所詮
はヒト。俺らウアリドウスと戦おうとすることがどれだけ無謀かつ
てこと、じいっくりに教えてやるぜエエ」

「顔にくっつきり靴跡付けながら格好つけんなバカタレ！」

「……このクソがあアっ！」

見下している相手につっこまれ、逆上したアトラツハが咆哮を上
げ銀に襲いかかる。

「来いやあああっ！」

咆哮で応え、銀も背中中の竹刀袋から木刀を引き抜き突進した。

「凄い……………」

呆然と、イリスは呟いた。

実際、銀は六本もの腕を持つアトラツ八相手に、木刀と拳、蹴り足だけで、さすがに互角とまではいかないものの、打ち合っただけで見せたのである。

だが、それも長くは続かなかった。ある時を境にして瞬く間に劣勢となり、連打を浴びる。

やはり、最終的な筋力や体力では圧倒的な差があったのである。

「ぐっ……………」

血と汗を散らしながら数メートル先に吹き飛び、大の字に倒れ込む銀。少し離れたところに、跳ね飛ばされた木刀が突き刺さった。

「思い知ったかあ、カスがア！」

勝ち誇って言うアトラツ八。

「銀っ！」

「どおこ見てんだよオ、イイリイスウウ」

銀の元へ駆け寄ろうとするイリスを、アトラツ八が嗤いながら蹴り飛ばす。小さく華奢な体はあっけなく吹き飛び、叩きつけられた先の地面で弾み、激しく転がる。

「野っ郎お……………」

その様を見て、銀が傷だらけの体を起こす。足元をふらつかせながらも立ち上がり、拳を握る。

「頑丈なやつだなア……………壊し甲斐があるぜエ……………」

喜々として歩み寄るアトラツ八に、しかし銀は何もできない。殴られながらも、ただ立っているだけ。

「ちくしょう……………」

「ぎやははははは！ なんだよオ、それはアよオ！」

のろのろと進む拳をわざと受け、哄笑を上げながら、更なる力で銀を打ちのめすアトラツ八。

「いい加減、寝ときなア！」

とどめの一撃を受け、銀は再び吹き飛ばされた。痛覚もはや麻

痺ってしまったらしく、意識できたのは落下の衝撃だけだった。かなりのダメージらしく、もう体が動かない。

どうやら偶然にも近くに飛ばされていたらしく、イリスの顔が薄暗い視界にひよこんと入ってきた。

ぼろぼろだ。泥にまみれ、切れた唇は血で濡れている。

「……………あなた、馬鹿だわ」

銀の顔を見下ろし、イリスは呟いた。

「けっ……………ほっとけ……………」

「私の素性を……………知って、体を、張ってくれた……………あなたで……………三人目……………あなたになら……………殺されてもいい」

放たれた不穏な言葉が鈍った頭に認識されるより前に、イリスは銀の上に倒れ込んだ。

柔らかい感触だけが、やけにはつきりと感じられた。

鉄の味が……………入って来る……………。

その様を見、アトラツハが呆れたような声を発する。

「オイオイオイ、正気かイリスウ？ 人間がリリトに感染したら、あっさり寿命使い切って死ぬぞオイ？ とどめでも刺す気かア？」

「あなた、最初から……………私、殺す気じゃない。自滅、前……………私が死ねば、いい。せめて……………彼……………生き延び、られ、まで……………私、が……………時間、を……………っ！」

背後のアトラツハに、頼りなくふらつく足を懸命に踏みしめ、歩み寄ろうとするイリス。

「やめ……………こら……………行くなよ……………」

止めようとする銀だったが、かすれた声しか出なかった。

「……………いいぜエ。思う存分に面白おかしくいたぶらせてもらおうじやねえかア。そおだア……………とどめはア、そのガキが自分の血のせいで死ぬのを見せてからにしてやるよオ……………うひゃひゃひゃひゃアッ……………」

アトラツハの哄笑を伴奏に、凄惨なダンスが始まった。そして、瀕死の銀はそれをただ見ていることしかできなかった。

目の前で傷つく少女。小さな体から、おびただしい量の真つ赤なしぶきが飛び散る。

起こっていることを、自分には止められない。

目の前で傷ついた女。倒れた細い体の下から、真つ赤な水たまりがとめどなく広がる。

起こったことを、自分には止められなかった。

いつしか、銀の視界には、別の、しかしよく似た映像が重なっていた。

「あ……あ、あ……ああ……！」

体が動かず、目をそ逸らすことさえできないのに、なぜ涙だけは一人前に流せるのか。無力な自分がただ歯がゆく、呪わしかった。

どうして、また。

倒れ込むことすら許されず、暴力にさらされ続ける少女。それは、影山銀をかばってのものだ。

もう、見たくなかったのに。

力がほしい。何も見殺しにしない、速い足。届く手。強い力が、ほしい。

焼け付くような渴望を最後に、銀の視界は暗転した。

「そろそろ終わりにするかア？」

もはや虫の息のイリスを、長い髪をつかんでぶら下げ、アトラッハはつぶやいた。

「さあアてエ……ガキの具合はどうだろうなア……？」

銀の方を振り返ろうとした、その時。

どくん。脈動と共にイリスの体が揺れた。

「？」

動きを止め、イリスに目を向けるアトラッハ　その腕が消し飛んだ。

支えを失い、イリスが蜘蛛の腕ごと地面に投げ出される。

「がああっ！　て……てめエはっ！？」

苦鳴を上げて振り返った先には

第五話「灼雷」

それは、「鬼」と呼ばれる存在に似ていた。

全身を鎧よろう外骨格、額の一对の角、指先から伸びる鉤爪かぎづめ、それら全てが夜の闇よりなお深い漆黒。

対照的に、背丈とほぼ等しく伸びた長い髪は、まばゆいばかりの白銀。腹部では禍々まがまがしい赫あかの珠がぼんやりとした輝きを放ち、立ち尽くすアトラツハを見つめる金の眼に、感情はない。

「フォルティスだとオ……冗談じゃねえぞオ、おい……ありえねエ……ありえねんだよオオツ！」

叫びと共に糸の束を吐き出すアトラツハ。

何の変哲もない蜘蛛の糸でも、同じ太さの鋼線を凌ぐ強靱さを持つ。ましてアトラツハは等身大の蜘蛛である。もはやそれは、人の想像の及ばない切れ味を持っていた。

フォルティスの腹の珠たまが、わけもなく人を不安にさせる輝きを放つ。同時に振り抜かれた手から、炎の揺らめきを伴う赫い雷がほとばしり、糸の奔流をあっけなく蒸発させ、さらに、射線上にあったアトラツハの半身を焼き焦がす。

「っがああアッ！」

苦鳴をあげてよろめくアトラツハとの間合いを詰め、拳を振りかぶるフォルティス。

「ちいつ！」

アトラツハが、半身の炭化した姿からは想像もできない機敏さを発揮し、それを危ういところで避ける。

火傷とさえ表現できない傷の表面に、赤い肉がにじみ出し、瞬間に広がる。もう再生を始めているのだ。

恐るべき生命力。人知を超えているのはうわべだけではないらしい。

轟音！ アトラツハがほんの一瞬前までいたところに、フォルテ

イスの拳を中心にした巨大なクレーターが穿たれた。

「ばっ……バケモ、がふうっ！」

すぐさま体勢を立て直したフォルティスの裏拳が、戦慄するアトラツハの顔面にめり込み、吹き飛ばした。

「ぐうはああっ！」

猛烈な勢いで飛び石と化し、地面に途切れがちな深い溝を残して止まったアトラツハの視界に、イリスが入った。

「な……なんだア!？」

小柄な体、その四肢が不自然に踊っている。体内では激烈な変化が起こっているらしく、骨や筋肉がきしみを上げ、それらによって手足が意思によらない異様な動きを見せているのだ。

どくん、どくん……という脈動。それはイリスの体内から、フォルティスの腹の珠から、重なって聞こえていた。

「ま……さか、共鳴してやがるのか!？ 冗談じゃねエっ！」

アトラツハは逃走に転じた。自分とは桁違いの脅威に、さらに援軍などがあつてはたまらない。

だが……彼が背を向けた時点で既に、フォルティスは先程放った赫い雷の発射準備を終えていた。

超高熱の顕現。アトラツハは断末魔の声を発することさえできぬまま地上から消滅させられた。

それは余計な予備動作を伴うだけあつて、同じものではあつても、先程とは比べ物にもならない威力を持っていたのである。

戦いとも呼べぬ一方的な示威を終えると、フォルティスはイリスの元へと歩み寄り、彼女を抱き上げた。

イリスの目がふと開かれ、黒銀の鬼を捉える。

「ぎ……ん……?」

ただたどしく言葉をつむ紡ぎ、自分に触れている感触が現実のものだと確認し、安心したのか、イリスは表情を緩め、再び脱力した。

「……ん？」

目が覚めてみると、若い女の顔がすぐ目の前から離れていくところだった。

「おはよう、王子様」

はにかんだような表情で顔をほころばせる女。なぜか、その顔には見覚えがあるような気がした。

そつだ。ずっと夢に見続けていた『三日月の女』と全く同じ姿。

「オレ……まだ、夢見てんのか？」

身を起こし、きれいに片付いた自室を見回してぼんやり呟く銀。

考えてみれば記憶もひどくあいまいだ。蜘蛛男と対峙し、あっけなくやられたような気もするが、それにしても体には痛みがないし、いつベッドに戻っていたのかも判らない。

「そつ、ね……まだ、寝ぼけているようだわ」

「おまえ誰だ？」

それは意外な問いだったらしく、女はバランスを崩してずっこけた。弾みで額と額がちんと音を立ててぶつかる。

「いてて……」

「いたた……」

そろつて痛そうに打った場所をさする二人。

「……私よ。イリス」

「嘘つけ。あのロリガキ……に似てないこともないか」

いかにも「女の子」なメゾソプラノと、しっとり柔らかなアルト。声を初め、身長も体型も、どう見たって別人だ……が、よく考えたら、髪は銀色、瞳の色は深い青。大ざっぱな輪郭は同じで、口調や態度には覚えがある。

「ろ……ロリガキ……」

「……！ あのバカどこ行きやがった！」

あまりにも素直過ぎる表現に絶句する自称イリスを尻目に、銀は跳ね起きていた。寝起きで鈍っていた頭に、昨晚の出来事が鮮明に蘇る。

「勝手に人をかばって死ぬなんて許さねえぞ！」

「待つて」

部屋を飛び出そうとする銀の腕を、女がとっさにつかむ。細腕に似合わぬ力で引き止められた結果、べしゃっと鈍い音を立てて、銀の顔面は床を直撃していた。

「………………。てめ何しやがんでえ！」

衝撃で呆けるのも束の間、すぐさま復活し、女にくっつかかる銀。

「だから、大丈夫よ。さっきから言っているでしょう？ 私が、その…………バカなの」

「え…………」

しばし、女の顔を凝視。にらめっこの末、銀は訊いた。

「いつの間に育ったんだよ…………」

既に非常識なことばかり体験している身だ、もはや驚くなどという無意味なこととはしても仕方がない。

「これが私の本来の姿なの」

「へ？」

「満月の前後三日間、私は力を失ってしまっわ。そしてあなたと会う前の晩、満月前夜に、あの蜘蛛男に腰から下を吹き飛ばされてしまったのよ。死にこそしなかつたけれど、体が足りなかつたから、あの姿になるしかなかったの。消耗が激しくて、周りの人たちにも随分迷惑をかけてしまつたわね」

困つたようにうつむくイリス。

「…………！ 二つともおまえだったのか…………」

猟奇殺人事件と集団貧血事件の真相を知り、銀は呆然とつぶやいた。言うことはいかにも痛そうだが、それから平然と生還してくるあたりがまた尋常ではない。さすがは吸血鬼。

「なぜ戻れたかは私にもよく解らないけれど、そうやって訊くということは…………覚えていないの？」

「なんのこつた？」

「そつ…………。なら、教えてあげるわ」

事情が飲み込めず、首をかしげることしかできずにいる銀に、イ

リスは説明を始めた。

「簡単に言うと、私の体の中には「リリト」と呼ばれる一種のウイルスがあるの」

「ウイルス？ 体壊さないのか？」

「生まれつきのものよ。私自身の体には何の影響もないの。それは直接私の血に触れない限りは感染しないけれど、一旦感染すれば、感染者は強力な治癒能力を得る」

「すげえな。おまえの血はすごい薬なのか」

「いいえ。毒よ。その治癒能力の源は、本人の寿命。新陳代謝が急加速し、身体能力そのものも超人になるけれど、理性はなくなり、外見も怪物そのものになり、長くは持たない。けれど一つだけ、薬にする方法はある。仮説だけれどね。リリトは感染者の体を私自身と同調させる。つまり、リリトが定着しきる前に私が死ねば、その時点までで感染者から私の影響は消え、傷がふさがるといった結果が残るはず。私はそれを試そうとした」

「あのときの……その、キスカ」

「ええ」

「でも、オレもおまえもこうして無事だよな」

「あなたが、特別だったの」

なぜかそこで、イリスはうつむいた。

「特別？」

「銀の体はリリトに適応した。今のあなたは獣化原種、フォルティス強きものと呼ばれる存在よ……たぶん、今までよりも身体能力は上がっているし、傷の治りもずっと早いはず。覚えていないかもしれないけれど、銀はフォルティスとしての姿に変身して、あのアトラッハを倒し、私を助けてくれた」

イリスの表情は暗い。が、銀にそれに気付かない。

「あの怪人たあ違うのか？」

「ええ。同じウイルスが発端になっているけれど、ウァリドゥス違うわ。あれは、ウイルスを応用して異種の遺伝子を組み込まれた、ウァリドゥス猛きものと呼ば

れる強化兵士」

「ふーん……」

よく解ったわけではないが、とりあえず頷く銀。だが、そんなのんきな様子を見て、イリスの表情がさらに翳かげった。

「……ごめんなさい、銀。生き延びてしまったせいで、あなたを人間以外のモノに変えてしまった……。今からでも遅くない。人間に戻りたいなら、私を殺して」

視線をそらし、腕を広げる。

「……ああ、あの時の言葉ってそういう意味だったのか」

イリスの行動に戸惑い、彼女の放った『殺されてもいい』という言葉を思い出した銀は納得してうなずいた。

(って……おいおい、マジか?)

ふとしたことに気付き、真っ赤になる。

半ばいやいやだったが、イリスとは今まで随分べたべたしてきた。まるで興味を持たなかった幼女の正体が、実はこんな美人だったとなると……困る。非常に、困る。

銀の葛藤など知るよしもなく、真面目に思いつめていたイリスは、反応の薄さが気になり、銀に視線を戻した。

「何とも……思わないの?」

「ん? ……あ、ああ、そうだな……どっちかってえと、嬉しいかな」

「うれ、しい……?」

わけが解らず、小首をかしげる。恨まれこそすれ、感謝される筋合いはない。

「自分じゃ覚えてねえけど、オレは変身した後、おまえを護ったんだろ? オレにとっちゃそれで充分だ」

「えっ……」

見る間にイリスの頬が桜色に染まってゆく。

「……オレ、なんか変なこと言ったか?」

当然といえば当然なイリスの反応に、怪訝な顔をする銀。

台詞だけなら愛の告白以外の何物でもないが、別に銀はイリスだけを護りたいと思っていたわけではなかった。

「ええと……その……朝御飯、できているから」

「変な奴……」

意識の差ゆえ、赤くなつてそそくさと立ち去ったイリスを評した銀の感想はその程度だった。

「……よく考えたら、あっさりなじんでるな、オレら
着替えを済まし、つぶやく。」

成り行きのまま、気が付いたら同棲状態。それほど互によく知り合っているというわけでもないのだが。

ウマが合う、というやつだろうか。

「ま、いいか。あいつのメシうまいし」

単純に割り切ると、銀はほりほり頭をかきながら階下へ降りて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4584ba/>

月煌戦鬼フォルティス

2012年1月12日16時52分発行